

アマゾン地域に暮らす人々と民間伝承：  
フアン・カルロス・ガレアノ『アマゾンのお話』を読む

佐藤 勘治

People in the Amazonia and their folklore:  
Reading *Cuentos Amazónicos* by Juan Carlos Galeano.

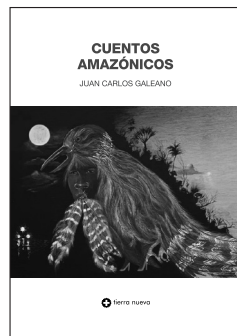
SATO Kanji

The book, *Cuentos Amazónicos* by Juan Carlos Galeano, has shown the influx of the major culture into the Amazonia and the interchange of the immigrants with the indigenous world. Analyzing two stories in the book, this paper describes the fluidity of indigenous peoples' identity in Latin America in comparison with the solid identity of *Yi*.

はじめに

この小論の目的は、第一に、本シンポジウムで講演していただいた詩人ガレアノ氏 Juan Carlos Galeano（フロリダ州立大学教授、コロンビア出身、以下敬称を略する）がアマゾン地域で収集し語り直した現代の伝承を、一部ではあるが紹介することにある。伝承は、『アマゾンのお話』にまとめられている<sup>1</sup>。

ラテンアメリカ先住民とりわけアマゾン地域の先住民における「語りの文化」の豊かさは、これまでも注目されてきた。彝族における伝承文化と同様、アマゾン地域の「語りの文化」は、娯楽であるとともに、同じ「語り」を共有する同じ社会に生きる集団としての結束力を高めるものになっている。彝族もまた、周囲の漢民族から巨大な影響を受けながらも、独自の



1 Juan Carlos Galeano, *Cuentos amazónicos*, Tierra Nueva, 2014.

言語や文字をもち、宗教、さまざまな芸能、儀礼をとおして、民族集団としての結束を長く維持してきた。代々引き継がれてきた彝文字の教典を彝族の司祭（シャーマン）ピモが読み上げるとき、その場は他者が介入できない親密な場に変わる<sup>2</sup>。アマゾン地域の住民は、民族的に一様ではなく、多様な来歴をもつものたちの集まりである。ガレアノの語る民間伝承に、世界はどのように描かれているのだろうか。

第二の目的は、主流社会との接触・交渉を通して揺れ動くラテンアメリカ先住民のアイデンティティをガレアノの収集した伝承との関係から論じることにある。中国少数民族のひとつ彝族は、その成員が彝族から離脱して漢民族になることは稀なこととされている。一般に、民族籍を変えることは行われないう。中国では少数民族であることは一般に有利であるが、彝族の場合には、それ以上の強固なつながりがある。一方、メキシコからカリブ海地域、中米、南米に広く居住し、数百の民族集団に分けられるラテンアメリカ先住民は、むしろ一様ではない。しかも、第3節で論じるように、ラテンアメリカでは、主流社会に入り込んだ先住民が伝承などの文化を維持しながらその先住民性を徐々に喪失することもある。アマゾン地域の「語り」の中には、ラテンアメリカに特徴的な、柔軟で曖昧な先住民性が現れている。

## 1 ガレアノ『アマゾンのお話』の舞台

『アマゾンのお話』には、ペルー、コロンビア、エクアドル、ボリビア、ブラジル、ガイアナにまたがる支流域を含めた広大なアマゾン川流域で、ガレアノが長年にわたって地元民から収集し、その語りを元に語り直した短いお話が43話掲載されている。シンポジウムではガレアノ報告にあるように、シャーマンによる実際の「語り」の場面が映像で紹介された。

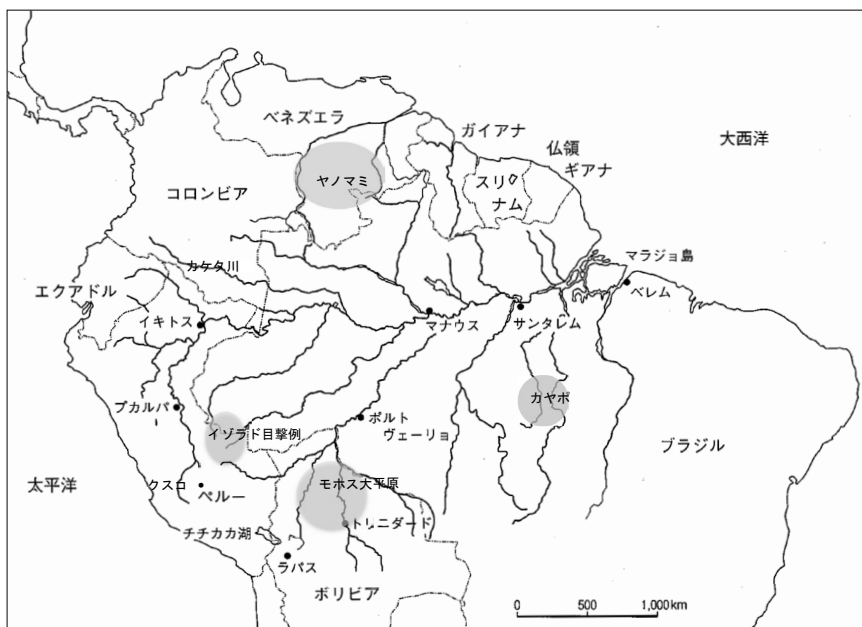
ガレアノは、子ども時代、コロンビアのカケタCaquetá川にある農場で暮らした。カケタ川は、アマゾン川の支流である。そのとき、ガレアノは、農園で働く地元民からたくさん話を聞いたという。地図で示したように、支流域を含めるアマゾン川流域は、ブラジルだけではなく、エクアドル、コロンビア、ペルー、ボリビアにまで及ぶ。その流域面積は世界最大で、オーストラリア大

---

2 筆者は、2015年度、2016年度に、獨協大学国際教養学部国際共同研究プロジェクトの一環として四川省涼山彝族自治州および成都での調査に同行した。この小論は、「彝語の世界」シンポジウムでの発表稿を大幅に改訂したものである。

陸ほどである。アマゾン川源流となる支流の多くは、アンデス山脈東側に発している。意外に感じられるが、世界遺産として有名なマチュピチュ遺跡の眼下を流れるウルバンバ川も、アマゾン川源流の一つである。

アマゾン川流域には、雨期になると広大な湿地帯が出現する。乾期におけるアマゾン川の川幅は、マナウス（ブラジル）まで平均5-11キロ、イキトス（ペルー）でも数キロにおよび、中流域の深度は平均40メートルである。



地図 アマゾン川流域

実松克義『アマゾン文明の研究』現代書館、2010年、40頁を元に作成。

南米の先住民について述べる場合、クスコ（ペルー）やラパス（ボリビア）、キト（エクアドル）など旧インカ領の先住民を思い浮かべることが多い。『アマゾンのお話』に登場するアマゾン地域の先住民は、歴史をさかのぼれば、インカ支配領域外の人々である。インカは、15世紀に急速に領土を拡大したが、アマゾン地域については地元民の抵抗に会い支配下におくことはできなかった。スペイン人やポルトガル人が植民地化した以降も、アマゾン地域の征服

は困難を極めた。ベネズエラ・ブラジルにまたがる熱帯雨林に住むヤノマミ Yanomamiの実像が広く知られたのが最近であることからわかる。また、「イゾラドIsolado (ブラジルでの言い方)」と言われる未接触先住民集団が近年しばしば映像にとらえられ、衝撃を与えている<sup>3</sup>。現代人が知ることの難しい世界がアマゾンにはいまだ存在する。

歴史研究でもアンデスのインカ文明にことさら焦点があてられてきたが、アマゾン地域の文明に関する調査も開始されている<sup>4</sup>。ボリビアのモホス大平原では、独自の文明の存在を示す痕跡が近年発見されている。マン『1491』は、「太古の時代から変わらぬインディオ」像はあやまりだと指摘する<sup>5</sup>。アマゾン地域の先住民は、いわゆる文明との接触をさけるため、森の奥に逃れたものも多いとされている。そのため、同じ言語系統の民族集団でも、遠く離れた地に分散する場合も多い。したがって、民族集団は、細分化されて、それぞれの人口は少ない傾向がある。

2007年調べでは、ペルーのアマゾン地域先住民の人口は33万である。54の民族集団が調査対象とされており、最大の集団アシャニンカ Ashaninkaが9万人ほどである<sup>6</sup>。1000人以下の集団は30で、その中には100人以下の集団が9存在している。細分化は、何をひとつの民族集団とみなすかの決定と関わっている。ブラジルでも同様のことが言える。ブラジルの統一調査を見つけられなかったが、ブラジル全土254先住民族集団について最新の人口調査を参照しよう<sup>7</sup>。ブラジルのアマゾン川流域の州（アマゾン州、アクレ州、パラ州、ラライマ州、 Rondônia州）に居住する先住民のうち、1万人以上の集団は、チ

3 ヤノマミ、イゾラドについては、NHKスペシャル「大アマゾン：最後の秘境」（2016年）シリーズによる映像が衝撃を与えた。<<http://www.nhk.or.jp/special/amazon/>>

4 実松克義『アマゾン文明の研究』現代書館、2010年。アマゾン地域の概要については、主に同書を参照した。

5 チャールズ・マン『1491：先コロンブス期アメリカ大陸をめぐる新発見』NHK出版、2007年。

6 Perú, Instituto Nacional de Estadística e Informática, Dirección Nacional de Censos y Encuestas, *Resumen ejecutivo - Resultados definitivos de las comunidades de la Amazonía peruana*, 2009, Cuadro No.1.1, pp.12-13.  
<[https://www.inei.gob.pe/media/MenuRecursivo/publicaciones\\_digitales/Est/Lib0789/Libro.pdf](https://www.inei.gob.pe/media/MenuRecursivo/publicaciones_digitales/Est/Lib0789/Libro.pdf)>

アマゾン地域の先住民族数、アシャニンカについては井垣報告第1節を参照されたい。

7 “Povos Indígenas no Brasil”, <<https://pib.socioambiental.org/pt/c/quadro-geral>>

クナTicuna 5万を最大にして、マクシMacuxi 3万、ヤノマミ 2万、コカマKokama 1万4000人である。大半は、1000人以下の集団である。総計では50万人ほどである。ブラジルでは、カヤボKayapóなどによる先住民運動の進展により、1988年以降、私有地を認めない先住民の土地が設けられている。先住民保護区はブラジル国土の12%におよぶ。コロンビア、エクアドル、ベネズエラでも保護区が設けられている。

冒頭で指摘したように、アマゾン川流域またその支流域を含めたアマゾン地域の住民、中でも先住民には、豊かな語りの文化が継承されている。レヴィ＝ストロースの大著『神話論理』には、南北アメリカの先住民に伝わる多数の神話が分析されている。レヴィ＝ストロースがM1（基準神話）とした「コンゴウインコとその巣」を伝えるポロロは、アマゾン川・ラプラタ川分水嶺地帯に住む人々である。『神話論理』とは別に発表された『やきもち焼きの土器づくり』は、ペルー・エクアドルのアマゾン支流域マラニオン川のヒバロの神話である。ノーベル文学賞作家バルガス・ジョサの代表作のひとつ『密林の語り部』が取り上げているのは、ペルーのマヌー川添いに暮らすマチゲンガの語りである。日本では、エセエハ（ボリビア）の神話が木村秀雄によって研究されている<sup>8</sup>。

次節で紹介するガレアノ『アマゾンのお話』は、伝統的な先住民共同体に伝わるいわゆる「神話」ではない。大河のもと森の中で自然と共生していると考えられがちなアマゾン流域には、ゴム栽培や森林伐採、金採掘など、開発や文明化という名目で、各地から人々が富を求めて流入してきた。アマゾン流域の人々の生活は様変わりせざるを得ない。先住民も、住む場所を変え生活のあり方を変えてきた。熱帯雨林から川に生活の場を移したカボクロと言われる人々もいる。大きな町も各地に出現した。環境変化の中で、人々は、様々な不可解な出来事を森や川の精霊や悪魔の物語としてあらたな「お話」を生み出している<sup>9</sup>。

---

8 クロード・レヴィ＝ストロース『神話論理』みすず、2006年；『やきもち焼きの土器づくり』みすず、1990年；バルガス・ジョサ『密林の語り部』岩波文庫、2011年；木村秀雄『響き合う神話：現代アマゾニアの物語世界』世界思想社、1996年。

9 たとえば、最近邦訳された本で、タウシグがコロンビアで語られる「悪魔の契約」の話を紹介している。マイケル・タウシグ『ヴァルター・ベンヤミンの墓標』水声社、2016年。ガレアノ『アマゾンのお話』でも取り上げられている。

## 2 二つの世界の接触

この節では、美しい書籍ガレアノ『アマゾンのお話』の中から、「お話」の一部を紹介する。「お話」は、地元のマスティーンがスペイン語で語ったものをもとに、ガレアノが「お話」としたものである。元の語りは、シャーマンによることが多い。詩人ガレアノは、それを自身のものとして語り直している。解説を担当したウゼンドスキは、ガレアノ自身が「シャーマンのようであり、そして読み手は患者のようである」と指摘している<sup>10</sup>。民俗学者や言語学者の仕事として、この書籍があるわけではない。ガレアノの作品そのものと考えてよい。

以下、『アマゾンのお話』から、主流社会からやってきた人々と先住民との接触が描かれている二つのお話を紹介する。(以下の翻訳は試訳である。)

### ヤラの贈り物<sup>11</sup>

アマゾン地方に行って金持ちになりたいと思っているリマ出身の若者がいました。夢を実現するため、材木を切り出そうとマヌー Manúに行きました。そこにキャンプを建てて地元の人たちを雇いました。ある日の午後、働き手の何人かは、食糧調達に出かけ、他の人たちもカバオ cabao の木を探しに出かけて、若者は一人きりになりました。そんなとき、若者の方にひとりの美しい娘が歩いてくるのが見えました。女の顔は綿よりも白く、目は銀色をしていました。娘は、小屋の前で立ち止まり、若者に微笑みました。

娘に話しかけたかったのですが、すぐ消えてしまいました。

その夜、川の方から聞こえる音楽で、若者は目が覚めました。起きて調べにいきましたが、それは溪谷を流れ下る水の音でした。ふたたび眠りましたが、音楽は続きました。小屋をでて見ましたが、誰もいませんでした。音楽で、三たび、起こされると、「見に行かなくてもいいだろう、なんでもないのだから」と独り言をいいました。

そして、まんじりともしない夜を過ごしました。

10 Michael Uzendoski, "Introduction," Galeano, *Cuentos*, p.17.

11 "El Regalo de Yara," Galeano, *Cuentos*, pp.41-42.

その後も、音楽は続き、家の近くで足音がしました。あの娘かもしれないと思い、会いに行こうとしましたが、怖くなってやめました。というも、男や女を捕まえようと川からでてくる水の民の噂話を聞いていたからです。若者はすごい恐がりだったので、十字架を握りしめてベッドから離れませんでした。

家の近くを歩き回る足音が聞こえてくると、若者は震えが止まりませんでした。

そこで先住民の一人からもらったイルカの歯を握りしめてみると、やっと眠りにつくことができました。

明け方、再び目が覚めました。地面でバタバタする動物の音と川の方からやってくるギターとバイオリンの音が聞こえました。戸口の間隙からのぞいてみると、中庭の地面で美しい魚が飛び跳ねていました。それはドラドdoradoでした。

魚をつかまえるために小屋をでようかと思いましたが、思いとどまりました。

魚の最後のあがきが、音楽が止むまで続きました。

働き手たちが帰ってくると若者は出来事を話して、娘が誰なのかを尋ねました。みんなが説明するところでは、若者に惚れてしまったヤラYaraだったに違いないということでした。「首に掛けているイルカの歯が娘をあきらめさせたのです。だけど、だんなさま、他の女にほれるのが難くなるのは確かです。どこの町に行っても、どこの国にいても、それはわかりありません。」

「それで、家の前で飛び跳ねていたあの魚はなんなのか」説明してくれと頼みました。

ひとりの先住民の働き手が言いました。「それは、朝食用にというヤラの贈り物です」、「幸運を運んでこようとしたのです。あなた様は、捕まえに外に出るべきでした。」

ルイス・アリムヤ・マイタブアリと  
アルトゥーロ・ブルガ・フレイタスの語りによる

## マピングアリ<sup>12</sup>

ガイ・ダベンポートの思い出に

テフェ Tefé 近くのアマゾン地方に、狩りが大好きな男がいました。ある日曜日、妻に言いました。——獲物がたくさんいる場所に出かけるとしよう。

——明日まで待つのがいいでしょう。——妻は男に助言しました。——日曜日に狩りに出かけるのはよくありません。

——日曜でも、腹は空くものさ。——男はライフルを手にとってそう言うと、出かけていきました。

山へ行く途中、狩りに誘おうと近所の家に立ち寄りしました。近所のひとは村の外にいきたくなかったので、男に忠告しました。——日曜日に狩りにいくのはよくないことだ。——男は次のように言って説得しました。——日曜でも、腹は空くものさ。——

二人の男は小さな川を渡って、何時間も歩きましたが、獲物は見つかりませんでした。まるで動物たちがみんな消えてしまったかのようなのでした。日が沈み始める頃になると、叫び声とそれに続いて物音と足音が聞こえました。巨人かと思いましたが、それは動物でした。巨大な黒毛猿に似ていて、亀のように甲羅があり、大きな緑色の目がひとつ、ひたいの真ん中にありました。

狩人は銃を構えて発砲しましたが、弾丸は甲羅を貫通しませんでした。

その生き物は、狩人に乗りかかり、片手で狩人をつかむと地面に叩き付けました。恐怖に駆られた近所の仲間は木によじ登って、そこから、狩人がバラバラにされるのを見ました。

狩人の腕にしゃぶりつきながら、その生き物はつぶやいていました。——日曜でも、腹は空くものさ——その次は、足です。——日曜でも、腹は空くものさ——

野獣が狩人を食べて、あくびをする様子を見て、近所の友人は集落に急いで戻りました。おこったことを話すと、男を食べた生き物が何だろうか当てようとするひとが何人かいました。——柱

12 “Mapinguari,” Galeano, *Cuentos*, pp.71-72.



のように大きな足があって、ひたいに目がひとつしかないなら、それはマピングアリに違いない——といとこたちが言いました。

——ルイスさん、あなたが食べられなかったのは、きっと猟銃をもっていなかったからです——と他の人が付け加えて言いました。ヘソを撃っていれば命が助かったはずだと物知りの村人が言いました。——その生き物の心臓があるのは実際その部分なのだから——村人たちは復讐を誓って、退治するための隊を組織しました。

あまり探す必要はありませんでした。というのもマピングアリは、狩人の骨をとりに戻っていたからです。

一団をみると、野獣はみんなを食べようとしてました。男たちは発砲しました。殺された狩人が撃った胸ではなく、今度は心臓があるヘソの所です。マピングアリは走って立ち去り、断末魔の叫び声をあげながら森の中に消えていきました。そして、友人たちは骨と野獣が食べ残した部分を袋に入れて、村に持ち帰りました。妻は、亡がらや何やらを小さな棺にいれました。そして、妻と子どもたちが二晩泣き明かした後、棺は墓地に運ばれました。女は泣いていました。——あー！私が言ったことを旦那が聞いてくれていたらよかったのに。——

何日もたたないうちに、女は子どもたちを連れて、マナウスに移り住み、そこで家族をもちました。

最初のお話「ヤラの贈り物」は、材木の切り出しを仕事とするリマ出身の若者が労働者として雇った地元の先住民から先住民の伝承を知ることになった「お話」である。ガレアノの解説によれば、ヤラ（もしくはイアラIara）は、川の底に住む白人種の明るい目をした生き物で、その歌声と美貌で男性を虜にする。ヤラは川の底の幻想の町に住んでいるという。ローレイの話が思い浮かぶが、先住民社会の宇宙観には、かなり前からヨーロッパ文化の影響がみられるとガレアノは指摘している<sup>13</sup>。

「マピングアリ」では、アマゾン地域へのキリスト教の浸透を明らかにみて

13 Galeano, *Cuentos*, p.140.

とることができる。マピングアリは、ブラジルのパラ川、マラニョン川地方ではカペーロボCapé-loboともよばれているという<sup>14</sup>。「日曜日は休息日」という教えが、森に生きる一つ目の妖怪マピングアリのお話と合体している。途中何度か語られる「日曜でも、腹は空くものさ」は、ポルトガル語である。この言葉の繰り返しがお話のリズムとなって、語りを豊かにしている。アマゾン地域では、プロテスタントを中心に先住民言語が研究され、布教活動が活発に行われている。なかでも、夏期言語研究所（現在の名称SIL International）は有名である。『ピダハン』の著者ダニエル・L・エヴェレットは福音派の宣教師だったが、ピダハンとの付き合いの中で信仰をやめることになったと書き残している<sup>15</sup>。『密林の語り部』にも同研究所の名が登場する。「マピングアリ」の最後、男に狩りに行かないように言った女がブラジル・アマゾンの200万都市マナウスに移住したと語られているのは、キリスト教の影響力の大きさを示している。

アマゾンの森や川には、たくさんの妖怪・精霊が住んでいる。ガレアノの「お話」の中には、森の植物と動物の守護者であり、足が後ろ向きについている精霊クルピラCurupiraを主題にしたものもある。クルピラは、アマゾン流域でもっとも知られた精霊・妖怪である。足が後ろ向きなのは、人間にどこにいるのか悟られなくするためだという。ペルー・アマゾンでは同様の性格をもつ精霊チュヤチャキChullachakiがいる<sup>16</sup>。呼び方が異なっても、アマゾン流域の世界では、同じ妖怪・精霊が共有されている。また、ガレアノによれば、欧米系の人々がカワイルカ（皮膚がピンク色をしている）に関係付けられて、お話に入り込んでいる。「マリアとカカイルカMaría y los delfines」は、親がいくら反対しても、イルカが変身したに違いない若者の誘惑に勝てずに若者のもとに行ってしまった娘の話である<sup>17</sup>。

これらの「お話」からは、アマゾン地域において先住民社会とメスティーソ社会が相互浸透している様子が、生き生きと伝わってくる。同書で解説を担当しているウゼンドスキは、近年の研究は「メスティーソと先住民の境界が以前

14 Galeano, *Cuentos*, p.145.

15 ダニエル・L・エヴェレット『ピダハン:「言語本能」を超える文化と世界観』みすず書房、2012年。

16 Galeano, *Cuentos*, p.149.

17 Galeano, *Cuentos*, pp.33-34.

考えられていたことよりも流動的」であると指摘し、『アマゾンのお話』に示されているとする<sup>18</sup>。

### 3 先住民族とメスティーソの境界

アマゾン地域では、前記ウゼンドスキの指摘のように、メスティーソと先住民の境界は揺れ動いている。強固な彝族アイデンティティと比較するため、この節では、ラテンアメリカの先住民アイデンティティをめぐる特徴を、上記の「お話」との関連で指摘していきたい。ラテンアメリカ先住民の各民族集団は、彝族をはじめとする中国の少数民族と同じくマイノリティと見なしてよい。しかし、おなじくマイノリティではあるが、違いは大きい。筆者の研究対象であるメキシコの先住民族と中国の少数民族を比べておこう。

両国には、ほぼ同数の民族集団（中国55、メキシコ60ほど）がある。中国の場合、民族集団は特定されているが、メキシコの場合には集団数を決定できない。メキシコの場合、話者数をもとにすると、最大の民族グループは、ナワ語話者で250万人ほど、第二位マヤ語話者では150万人、話者数1万人を切るものは20ほどある。一方、中国最大の少数民族チワン族は約1600万人、続いて満族と回族がそれぞれ約1000万である。彝族は、871万人で6番目である。10万人を切る民族は20ほどある<sup>19</sup>。中国では最大の民族集団漢族が90%以上を占めている。メキシコの場合も、先住民以外の比率は84%（2010年調べ、79頁表参照のこと）である。中国の人口は約13億でメキシコの約10倍であり、少数民族集団が総人口に占める比率では、両国は似たところがある。

しかし、10倍という絶対数の違いと特定地域への集中度の違いは、文化の維持、政治、行政サービスや教育など政策実効において、決定的な違いを生んでいる。小さな国家規模の人口をもつ彝族の場合、たとえば、四川省内に涼山彝族自治州をもつことで、言語教育にみられるように少数民族向けの独自教育が制度化され、広範に行なわれている（浅山報告参照のこと）。人口規模がある程度大きいこと、しかも集住していることによって、行政サービスにおいて資

18 Uzendoski, "Introduction," Galeano, *Cuentos*, p.18. ウゼンドスキは、『アマゾンのお話』のもうひとつの特徴として、パースペクティブ主義を指摘する。パースペクティブ主義に関しては、エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロ『食人の形而上学：ポスト構造主義人類学への道』洛北出版、2015年、参照のこと。

19 中華人民共和国国家統計局（2010年第6回全国人口調査）

<http://www.stats.gov.cn/tjsj/ndsj/renkoupuocha/2000puocha/html/t0201.htm>

源動員がしやすい。ラジオや新聞などのメディアでも同様である。調査で訪れた涼山彝族自治州の中心都市西昌（シーチャン）では、店名として看板に彝語文字表記が、法律で義務づけられている。

最も大きな差異は、これまで指摘してきたように、先住民として帰属の有無が明確かどうかである。中国の場合、どの民族集団に属しているかを示す民族区分が身分証明書類など公的書類で明確になっている。少数民族である方が社会生活において優遇されることが多く、選択可能な場合には一般に少数民族を選ぶとされている。彝族の場合、家族の系譜が口伝されており、各成員に認知されている。

ラテンアメリカでは、多くの場合、自己認識では先住民の帰属先が明確であっても、公的書類などで登録管理されている訳ではない。建前ではあるが、市民として主流社会にいる人々と同等の権利があるとされていたのである。行政サービスにおいても、先住民だけを対象とした施策がこれまでなされてこなかった。その背景には、先住民インディオはやがて「文明化」されて消滅する運命にあるという考えがあった。独自の先住民言語や服装はやがて失われ、生活スタイルなども変化して徐々に主流社会に取り込まれる、先住民共同体から出て、町に移住すると一層その傾向が進展すると考えられていたのである。メキシコの場合、それはメスティーン化と呼ばれていた。国勢調査などでも、メキシコの場合、先住民言語話者調査以外ならく行われてこなかった。

しかし、こうした展望が誤りであったことは、今では明らかである。先住民は、道路などのインフラ整備や、電話・インターネットなどの普及によって、都市にでも出身共同体とのつながりを維持するようになった。祭りに際しての献金あるいは帰郷することも容易になった。また、出身共同体や民族集団が都市の特定地域に集住することもあり、その場合には一層、先住民としてのアイデンティティが維持される<sup>20</sup>。いまでは、メキシコの先住民は米国に移民することも多い。ニューヨーク市在住のプエブラ・ミシュテコ出身者の子供たち（米市民権をもつ）のなかには、夏休みなどになると両親の出身村で過ごすのが習慣となっているひともいると、報告されている<sup>21</sup>。

20 禪野美帆『メキシコ、先住民共同体と都市：都市移住者を取り込んだ伝統的組織の変容』慶応義塾大学出版会、2006年。

21 Robert Smith, *Mexican New York: Transnational Lives of New Immigrants*, University of California, 2005.

世界的な先住民運動の高まりや、多文化主義のながれのなかで、1990年代以降、ラテンアメリカ諸国の多くで、先住民としての権利が憲法などに書き込まれるようになった。メキシコでも、1992年に憲法が改正され複数文化国家だと宣言された。憲法第4条には、次の一文が設けられた。「メキシコ国家は元来先住民村落において維持された複数文化的構成要素をもっている」。さらに、近年、ILOの第169号先住民条約の規定に基づいて、自己認識としての先住民調査が始められている。

表は、2000年と2010年でのメキシコ先住民人口調査である。推定先住民人口は、2000年に全人口の12%だったのが、2010年には16.5%に大きく増加している。増加の主因は、2000年に比べて10倍以上になった自己認識として先住民とするものの増加である。2000年の調査では、自己認識に関わる設問が、「(当該者)は、ナワ、マヤ、サポテコ、ミステコ、あるいは他の先住民集団出身ですか」だったのにたいして、2010年には、「文化に関して、(当該者は)先住民と自分を見なしますか」に変わった。民族集団名を特定しないことで、「先住民」と答える人が増えたことを示している<sup>22</sup>。

表：メキシコ先住民集団アイデンティティ調査 2000年、2010年

集団	2000年 (人)	2010年 (人)	2010/2000 (%)
先住民家庭	2,176,452	2,518,681	15.7
先住民言語話者	6,320,250	6,768,989	7.1
先住民家庭内居住者	10,631,508	11,397,722	7.2
非先住民家庭内先住民言語話者	234,570	128,707	-45.1
先住民人口総計	10,866,078	11,526,429	6.1
先住民自己認識人口	628,753	7,036,463	1,019.1
推定先住民人口	11,494,831	18,562,892	61.5
メキシコ全人口	97,014,867	111,960,139	15.4

出所：CONEVAL, *La pobreza en la población indígena de México, 2012*, 2014, p.36. cuadro 1: Identificación de los grupos que componen la población indígena, 2000 y 2010.  
表中「先住民家庭」については、人数ではなく家庭数である。

22 Consejo Nacional de Evaluación de la Política de Desarrollo Social (CONEVAL), *La pobreza en la población indígena de México, 2012*, 2014, pp.36-37.  
< [https://www.coneval.org.mx/Informes/Coordinacion/INFORMES\\_Y\\_PUBLICACIONES\\_PDF/POBREZA\\_POBLACION\\_INDIGENA\\_2012.pdf](https://www.coneval.org.mx/Informes/Coordinacion/INFORMES_Y_PUBLICACIONES_PDF/POBREZA_POBLACION_INDIGENA_2012.pdf)>

かつては、言語や外見から先住民であると他者から判断されていた先住民性が、いまでは、特定の民族集団を離れた自意識となっていることが窺える。こうした傾向は、メキシコだけにとどまらない。たとえば、ボリビアの都市先住民女性チョリータcholitaのように、誇りをもって意識的に先住民女性伝来の衣装を身につける人々も出現している。特定集団への帰属が表現されているということよりも、自意識としての先住民性の表明だと考えられる。ラテンアメリカにおいては、先住民性は、長い間、様々なレベルにおいて流動的だった。かつては、先住民からメスティーソへの移行が標準的だったといえるだろう。しかし、いまでは、先住民性が強固に選ばれる場合がある。

### おわりに

どのような人であっても、アイデンティティは本来重層的、階層的なものであり、状況に合わせて常に使い分けられている。木村秀雄は、アマゾン地域の先住民が自らを認識し表現する際に、階層化された社会カテゴリーの上位区分、下位区分のどれを用いるかは、揺れ動くと指摘している。また、先住民（木村はインディヘナと呼んでいる）と非先住民の関係では、相互に影響がみられるとして、例えばクスコでは近代医療と呪術師の連合を指摘する<sup>23</sup>。ガレアノの「お話」にあるように、アマゾンにおいてこの傾向は明瞭である。ウゼンドスキが指摘するように、先住民内の区分をそのまま越えて、次の区分である先住民と非先住民の境界が揺らいでいるとみるのがいいだろう。

ガレアノのお話に描かれている先住民と非先住民の交流は、他のラテンアメリカでもみられることである。たとえば、『バルン・カナン』は、カステリャノスの子供時代の経験がもとになっているが、メキシコ・チアパス高地のラディーノ社会（主流社会のこと）と先住民社会との交流が描かれている。先住民起源の伝説がラディーノ社会で自分たちのものとして語られる<sup>24</sup>。アマゾンのできごととは、他の地域でも進行している。彝族の語りにも、外部世界とのつながりを示すものがあるだろう。そして、強固にみえる彝族アイデンティティ

23 木村秀雄「インディヘナと揺れる綱：ラテンアメリカ」蓮實重彦・山内昌之編『いま、なぜ民族か』東京大学出版会、1994年。

24 ロサリオ・カステリャノス『バルン・カナン：九人の神々の住むところ』行路社、2002年。同書には、ズルムdzulum（19頁）や大帽子El sombrero（67頁）などの精霊・妖怪が登場する。田中敬一「『バルン・カナン』再読：ポストコロニアルの視点から」『紀要・言語・文学編』（愛知県立大学外国語学部）第36号、211頁。

アマゾン地域に暮らす人々と民間伝承：フアン・カルロス・ガレアノ『アマゾンのお話』を読む

であっても、流動化の傾向があるかもしれない。先住民と非先住民の中間領域とそこに生きる人々の「語り」を知ることは、ラテンアメリカ研究のなかでも注目すべき研究領域だと思われる。

